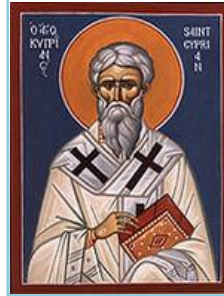


9月13日

殉教者主教シプリアン

Κυπριανός Καρχηδόνος
(200頃～258)
～教会の一致をもとめて～



「聖キプリアヌスのイコン」

人名辞典などでは、キプリアヌスと表記される。彼は、現在のチュニジアにあたるカルタゴで、裕福な異教徒の家庭に生まれた。そして弁護士や修辞学の教師をしていた。

246年、彼は長老であったカエキリアヌスに導かれ、キリスト教の信者となり、すぐに司祭となる。そしてその2年後、カルタゴの司教に選ばれる。

さて、その当時はまだ教会に対する迫害が起きていた。250年から皇帝デキウスによる迫害が起こったのだが、その時シプリアンは身を隠し、教会に対して、そして牢や山で強制労働をさせられている信者に対して励ましの手紙を書き、そのことを通して指導をしていった。

ところが迫害に耐えられず、信仰を捨ててしまったり、信仰を捨てたふりをして棄教証明証をもらう者が続出する。

迫害が終結し、シプリアンは教会に戻ったが、そのように棄教してしまった者らの処遇をどうするかで、教会の対応は分裂した。そこでシプリアンは親しくなった教皇コルネリオと共に教会会議を開き、事態の解決を図る。以来、この解決の仕方は北アフリカの教会の伝統となっていく。

しかしその後、教皇になって3年後の教皇コルネリオは皇帝によって追放されてしまう。

シプリアンはその後、ペストが流行した時には市民のための医療活動を行うなど、司教として働いていたが、255年、異端者による洗礼に関する論争が起こる。洗礼を授けたものが棄教した場合、その洗礼は有効なのか否か、という論争を解決すべく、教会会議が開かれたが、無効性を主張し、再洗礼を要求した彼はローマ教皇と対立した。その後、257年からのウァレリアヌス帝の迫害により捕らえられて処刑される。その際、裁判官に「彼は断頭されるべきである」と言われた時に、シプリアンは「神に感謝」と言い、刑の執行の際には執行人にお礼としてお金を渡したと言われる。

彼は「教会を母として持たない者は、神を父として持ちえない」との言葉を残した。(Y)

<特禱>

全能の神よ、あなたはみ力と恵みによって、聖なる殉教者主教シプリアンに苦難に勝ち、死に至るまで忠実である生涯を与えられました。どうか恵みをもってわたしたちを強め、どのような迫害にも耐え、主イエス・キリストのみ名を忠実に証することができますように、主は父と聖霊とともに一体であって世々に生き支配しておられます。

アーメン